『菅家文草』をめぐって

――菅原道真没後一一〇〇年に向けて――

本間洋一

一　『菅家文草』『菅家後集』研究への期待

もうかれこれ三十年近い昔のことになる。通っていた大学の近くの古書肆で一冊の分厚い本を購入した。それはそのまま古書の棚に並べて置くには惜しい程に真新しい。函中の本体を包むパラフィンにもいささかの歪みなく、果たして見開かれたことがあるのだろうかとさえ思われた。恐る恐る頁を繰る。すると漢詩の白文と訓読文、それに隙間のない程にびっしりと付された頭注が延々と続く……。その書の扉には「日本古典文学大系72　菅家文草　菅家後集　川口久雄校注」（昭和四十一年十月五日第一刷。稿者の入手したのは昭和四十四年七月三十日第三刷）とあった。

当時大学二年で、書道に少々凝っていた以外不真面目な学生であった自分には初めて目にする書名である。書との関わりで戯れに漢詩作りの真似事などしていたから、その筋には聊かの関心を抱いていたのだが、読み始めて正直驚いた。平安時代も前期に個人でこのような大部の漢詩文を今日に残している人物がいたとは……。しかもそれが、他ならぬ遣唐使を廃止した菅原道真であり、文学としては「このたびは幣もとりあへず」の和歌か説話伝承の世界の人物（天神様）としてしか全く意識になかった人の詩文であったからで、さらにはその詩文中に思いがけない程に豊かな精神生活が展開していたからであった。当時少し読み始めていた唐代の著名詩人の作とはかなり違った印象を受け、次第に興味を持つようになるのだが、この川口久雄

博士の大系本の偉業――『菅家文草』『菅家後集』の本格的研究に先鞭をつけたのみならず、一般への道真漢詩の普及に画期的成果を齎し、享受する読者層を飛躍的に増大させた――についてはまだ当時知る由もなかった。そして、刊行から三十五年を経た今日にあってもその業績は揺ぎなく貴重な財産であることに変わりない。

ところが、日本古代文学の世界にあって、これ程の量と質の漢詩文集を前に、研究者の論議は決して多いとは言えない。否、むしろ少な過ぎると言うべきであろう。その研究情況については、至文堂『国文学　解釈と鑑賞』（特集・平安朝漢文学の世界）（平成二年十月、第五十五巻十号）、学燈社『国文学』（特集・菅原道真と紀貫之）（平成四年十月、第三十七巻十二号）で、各々藤原克己・金原理両氏がまとめ論述されているのが参考になる。それ以後について記すのは本稿の目的ではないので管見の範囲で略記するに留めるが、『菅家文草』『菅家後集』の注釈が佐藤信一・柳沢良一・焼山廣志氏らにより行われつつあり、山本登朗氏の成果（日本漢詩人選集1『菅原道真』研文出版、平成十年。五十六首を精選）も出た。論文では菅野礼行・後藤昭雄・波戸岡旭・新間一美・滝川孝司等の諸氏が論及しているくらいであろうか。仮名文学の物語や和歌が一条一首に拘って論じられている情況を鑑みる時、猶やはり寥々たる感は免れない。

稿者の所属している和漢比較文学会では、間もなく訪れる菅原道真没後一一〇〇年を控え、道真の文業を中心とするシンポジウム開催や道真（含その周辺）について様々な視点から論ずる企画を立て、近くその内容を発表する予定である。多くの研究者に参加して戴くと共に、また一般の方々にも広く興味と関心を抱いていただけるようなものになったら、と念願している。殊に道真の漢詩文についてより広く多くの人に注目され、論議の俎上にのせられる機会の増えんことを強く期待せずにはいられない。その思いを込め、以下に日頃思っていることなどを聊か認めてみたい。

二　『菅家文草』の本文をめぐって

『菅家文草』や『後集』については前述したように川口久雄博士の校注本（岩波古典文学大系）が今後も研究の基盤になることは無論である。読み始めた学生の頃、未熟さ故に正直言えばその蒼古たる訓読――それは平安朝前期の訓読情況を復元したいという川口博士の学問的方針に依るもので意義あることで

はある――に荘重な印象を覚えると共に、後世の訓読法に馴染んでいる身には違和感もまた禁じえなかった。恐らく学究者でもない限りこの訓読に終始ついてゆける読者はそう多くはないだろう、もっと訓み易くならないものかと思うのだが、ともあれ先づは大系本本文の可否を問うことから始めたい。

道真が文章生試に備えて詩作の修練を重ねていた時期の作に次のような作がある（猶、訓読は必ずしも大系本に依らない。白文は大系本の本文、訓読の方は私案で改め、違いをゴチック体で見易くして掲げる）。

5　賦二得詠レ青。一首。〈十韻、泥字、擬作〉

正色重冥定　生色　重冥　定まりて
生民万里睇　生民　万里に睇る
寄書仙鳥止　書を寄せて　仙鳥止まり
干呂瑞雲低　呂を干して　瑞雲低る
馬倦経丘岳　馬は　丘岳を経るに倦み
車疲過坂泥　車は　坂泥に過るに疲る
雨晴山頂遠　雨晴れて　山頂遠く
春暮草頭斉　春暮れて　草頭斉し
井記鳧張翅　井には記す　鳧の翅を張るを
田看鶴作蹊　田には看る　鶴の蹊を作すを
水衣苔白織　水衣　苔白らに織り
天鑑霧無迷　天鑑　霧に迷うことなし
髣髴佳人**家**　髣髴たり　佳人の**冢**
潺湲道士渓　潺湲たり　道士の渓
鋪蒲今未奏　蒲を鋪いて　今に未だ奏せず
紋竹古応稽　竹を**殺**して　古を応に稽うべし
故意霞猶聳　故の意を　霞のごとく猶聳かせ
新名石欲題　新しき名を　石に題せんと欲す
明経如拾芥　経に明らかなれば　芥を拾うが如し
廻眼好提撕　眼を廻らして　提撕を好む

「青」（一部「蒼」も意識するか）に関わる典故を意識しつつ字句を重ねて完成させた知的な営為の作で、既に川口注が指摘しているようになかなか手の込んだ作だが、今問題にしたいのは第十三句「家」と十六句「紋」である。前者の「家」（下平声麻韻）は平仄上先づありえない。本来仄声の文字が入るべきところだ。「冢」（林道春本）「冢」（日本詩紀）の校異で容易に推察もされるが「冢」（上声腫韻）でなければならない。従って頭注に云うような「青楼の中に見える青蛾の美人をいう」のではな

い。既に佐藤信一氏が指摘するように王昭君の墓所として伝えられている「青冢」をここでは意識しているはずである。[1] この地名は「王昭君変文」や李白・皎然らの「王昭君」詩、杜甫「詠懐古蹟」詩、李商隠「聞歌」詩等にも見え、白楽天には「青塚」（塚と冢は通用）、杜牧にも「青冢」詩があるのはよく知られているところだ。従って区中の「佳人」は妓楼の女などではなく王昭君を指すことになる。

次に「紋竹」。稿者が疑念を抱いたのは頭注に掲げられる娥皇・女英（共に尭の娘で舜妃となった）の斑竹の故事では「青」と関連がないと思ったことが発端。頭注はそこで「緑竹青々」たる竹が「斑竹」となったと結びつけ、「紋」は「斑」の誤写か、とまで勘案しているわけであるが、猶疑念を拭えない。ただ殆どの諸本が「紋」に作るところを「敃」（林道春本）と綴る写本を見た時、疑念は氷解した。「紋」は恐らく「敃」から生じたもので、その逆は先づありえないだろう。では「敃」はどのようにして生じたのか。嘗てよく目を通した異体字研究の必読書『干禄字書』や『類聚名義抄』（観智院本）の次のような記事を想起せずにはいられなかったのである。

敃（林道春本）
煞 敘殺 上俗中通下正（干禄字書）
敘 敏 通殺正　敘 敘 谷　敎（名義抄）

つまり、「殺」の異体字が書写の過程で前記のように書き留められる蓋然性が高いと考えた。すると「殺竹」とは何か。それは例えば「青簡（応劭風俗通曰、殺青書可二繕写一。謹按、劉向別録曰、殺青者、直用二青竹簡一書耳）」（『初学記』巻二十八・竹）や「殺レ青者、以レ火炙レ簡、令レ汗取二其青一。易レ書復不レ蠹。謂二之殺青一、亦謂二汗簡一」（『後漢書』呉祐伝所引注）とある竹簡の作り方に因む。竹を火であぶりその青味と油分を除き文字を書き易くすると共に蠹損を防止したことをふまえ、ここでは文書や書物の意に解して良いと思う。[2] それでこそ「古応稽」（昔のことをよく考え学ぼう）の意と密接に繋がることになるのではあるまいか。

諸本間に異同があっても、どちらがより適切か選択することはそう困難なことでない場合が多い。大系本はより適切な本文をまま捨ててしまっているのでないかと思われるふしがなくも

ない。ともあれ、文字校訂に当たっては、所謂異体字関係、更には誤写し易い字例をいつも脳裏に置いて慎重に検討しなければならないようである。以下更に「妄りに雌黄を下す」ことも恐れず、若干の例を挙げてみよう。

＊　＊　＊

仲**春**釈奠礼畢　王公会二都堂一、聴レ講二礼記一。

（14番詩題）

年二回（仲春と仲秋の上丁の日）釈奠が行われていることはよく知られている。川口博士は当時の釈奠の講書が『孝経』『礼記』『毛詩』『尚書』『論語』『周易』『左氏伝』の順送りで行われたことを明らかにされている。[3] ところが、貞観九年仲秋（八月十一日）に「釈奠、如二常儀一」（『三代実録』）と記されているのを見落とされたらしく、前掲題詩を貞観十年仲春の釈奠作とされた。私案に依れば博士の作成された表は実際は同九年以後半年繰上げて考えねばならないことになるのだが、「春」字に異同がないだけに惑うのはやむをえないかも知れない。今は博士が明らかにされた講書順（稿者は正しいと考える）を改めて生かし比定すると左の如くなる。

〈年〉	〈春〉	〈秋〉
貞観二年	毛詩	尚書
〃三年	論語	周易
〃四年	左氏伝	御註孝経
〃五年	（止）	礼記
〃六年	毛詩	尚書
〃七年	論語	（止）
〃八年	周易	左氏伝
〃**九年**	御註孝経	**礼記**
〃十年	毛詩	尚書
〃十一年	論語	周易
〃十二年	左氏伝	孝経

即ち、前掲『礼記』の講説は、前後の詩の作時などを考慮（つまり配列をほぼ年次順とすれば）して貞観九年仲**秋**（同五年仲秋の可能性もある）とあるべきではないのだろうか。[4] 春秋を道真又は後人が思い違いをしたり、誤写した可能性はないのだろうか。因みに前掲詩以後の『文草』巻一に見える釈奠詩を右に当てはめておくと次のようになろう（猶、詩の配列順は作次順であることを必ずしも保証しないかも知れない）。

23仲春釈奠聴レ講二論語一→貞観十一年仲春か同七年仲春。

28仲春釈奠聴レ講二孝経一同賦二資レ事レ父事レ君→貞観九年仲春。

41仲春釈奠聴レ講二毛詩一同賦二発レ言為レ詩→貞観十年仲春。

55仲秋釈奠聴レ講二周易一賦二鳴鶴在レ陰→貞観十一年仲秋。

＊　＊　＊

先生幸許禁闈遊　先生幸いに禁園に遊ぶことを許され
更恐時光不暫留　更に時光の暫くも留まらざることを恐る

（35「寄二巨先生一乞二画図一」）

この詩の題下注に「于レ時先生為二神泉苑監一、適許二遊覧一、仍献乞レ之」とあるから、巨勢金岡（高名な画人）が神泉苑の管理を担当することになり、役務上苑中を視察でもしたことを詠んだものと思量される。「闈」は一般に宮門の意であって、「禁闈」は朝廷・宮中の意で用いるのが普通である。確かに神泉苑は宮中に近い（美福門を出た二条大路のすぐ東南にある）。しかし、これを宮中とすることはできない。「闈」はしばしば写本中で「圍（＝囲）」や「園」に誤写されることがあるが、臆測すれば「禁園」とあったのではなかろうか。「神泉苑者、禁苑之其一也」（源順「冬日於二神泉苑一同賦二葉下風枝疎一」『本朝文粋』巻十・314）などとあるのも参考になろう（園と苑は通用する。）

＊　＊　＊

含情若読新章句　情を含みて苦に読む新章句
拭眼驚看旧判文　眼を拭いて驚き看る旧判文

（50「奉レ和下王大夫賀二対策及第一之作上」）

貞観十二年、勉学に精進した甲斐あって対策に及第した道真は王大夫から祝詩を贈られ、それに答えた。上句に依れば齋された祝詞を「感激の情をもって」（大系本頭注）読んだのは間違いないと思うが、それを「若しくは読む」と訓んだのでは気持ちが弛緩してしまうのではないか。ここは「苦に読む」とどうしても訓みたいのだがどうだろう。

＊　＊　＊

眠疲也嘯倦　眠るにも疲れ　也　嘯くにも倦み
歎息而鳴慨　歎息して　鳴慨す
為客四年来　客と為りてより　四年来
在官一秩及　在官も一秩に及べり
此時最攸患　此の時に　最も患うる攸は
烏兎駐如繫　烏兎の駐まりて繫がるるが如きこと
日長或日短　日の長く　或は　日の短く
身騰或身繫　身の騰り　或は　身の蟄ることあり

自然一生事　自然なり　一生の事
用意不相襲　意を用いて　相襲ねず
（92「苦二日長一」）

讃岐守の任に在ること四年。任期明けを待ち望む長い一日。少壮年時の多忙な日々の回顧に始まり、やがて受領として転出した悲哀の情を詠う名篇の後半を過ぎたあたりから引用。脚韻は入声緝韻であるからすぐに「慨」が誤りと見当がつくし、「繫」の重複もおかしいと知れる。前者には「嗚悒」（来歴志本・日本詩紀等）の異同があるので簡単に訂正できる。「嗚悒」は「嗚唈」に同じく悲歎の涙にくれる、むせび泣く意。後者については、対句関係を見定め、「騰」と反対の字義で緝韻、しかも「繫」に字形が近いとなれば「蟄」しかない（版本の傍書は正しい）。これなどは極めて容易な校訂作業に過ぎない。

＊　＊　＊

葉間繊尾騰枝**塵**　葉間の繊尾は　枝に騰る**塵**
樸上枯鱗繞樹龍　樸上の枯鱗は　樹を繞る龍
（449「賦三秋思入二寒松一」）

詩序は親友の紀長谷雄が作した（『文粋』巻十・287）。本詩は『扶桑集』（巻十二）にも所収。『類題古詩』（通称『類聚句題抄』）に長谷雄の詩と共に収められていることから、或は共に『扶桑集』に収載されていたかも知れない。ともあれ、上句の「塵」（上平声真韻）では平仄が合わない。『類題古詩』には「**龍鱗**暗変留二鉛粉一、**塵尾**斜傾帯三玉陰一」（菅野名明「山明望二松雪一」）という同様仕立ての表現があり、「塵尾〈周景式廬山紀曰、石門北巌即松林也。有二数百株松一。大皆連供、長近二十丈一。攢生三絶崖上一、南臨二石門澗一。澗中仰視レ之、離々如レ駢二塵尾一（下略）〉」（『初学記』巻二十八・松）という故事に依っていると考えられるから、「**塵**」でなければならないだろう。[5]

このように気になる本文が散見し、『文草』研究は更なる検討が期待されていると言ってよいであろう。「鶴**驚**寒更三転後、蜂喧晩歩十廻中」（70「九日侍宴同賦二紅蘭受レ露一」）は「鶴**警**（周処風土記曰、白鶴性警、至二八月白露降一、流二於草葉上一、滴々有レ声則鳴）」（『初学記』巻二・露）の故事と平仄（「驚」は下平声庚韻）の関係から「**警**」（上声梗韻）に改めるべきであろうし、「為レ臣為レ子皆言レ孝、何啻春風仲月**下**」（81「仲春釈奠聴レ講二孝経一」）は他の脚韻字（下平声青韻）からしてもありえず、版本等の「**丁**」（釈奠は春秋二仲の月の上丁の日に行われる規定で

ある）でなければならない。また「意猶如二少日一、只已非二昔春一」（254「対鏡」）は対句の意味から考えても書写の過程で「貞（＝貌）」を誤ったものと言う他なく、次々と疑念が湧いてくる。以上は実はほんの一端に過ぎないが、『文草』『後集』はどのように読まれるべきなのか、道真没後一一〇〇年企画の一つとして、本文の再検討作業も学会を中心に始められており、その成果が世に問われるのもそう遠いことではない。

三　詩の解釈をめぐって

詩の解釈は勿論本文の確定と字句の正確な把握がなされてこそ達成されよう。その意味では前項に記したことも既に詩の解釈に関わる問題ではあったのだが、ここでは更に詩一首全体の理解、解釈のあり方として、稿者なりに思案したことを川口博士の注と対比させながら記してみたい。

43王度読二論語一竟、聊命二盃酌一。

円珠初一転　円珠　初めて一たび転ず
舞象遂丁年　象を舞いて　遂に丁年たり
自此窮墳典　此れより　墳典を窮めよ
何唯二十篇　何ぞ唯だ二十篇のみならん

王度という人物については所掲の川口注以上のことは言えない。その彼が『論語』を読了したので祝意を込め酒盃を命じたという題。川口訓読は稿者と異なるが、それは措いて少し長いけれどもその頭注・補注を掲げてみたい（一部ゴチック体は稿者に依る。）

（題注）王度の囲碁のこと、三一題注・補一参照。（補注）**「王度」は当時来朝していた大唐の通事か**―三一。一時菅家廊下もしくは大学寮に寄留して、経書などを中国音で講読していたのでもあろうか。この詩はその終了した時の竟宴の五絶。（第一句注）円転窮まりない明珠にも比すべき論語を、**王度は中国音で一読過し終った。**わが博士家では論語を「円珠教（ママ）」といった。[6]（補注）梁の皇侃の論語義疏序に「鄭玄云、論者輪也。円転無レ窮、故曰レ輪也」、また「巨鏡百尋、所レ照必偏。明珠一寸、包二含六合一（中略）故言、論語小而円通、如二明珠一。諸典大而偏用、譬如二巨鏡一、誠哉此言也」とある。源順の「陪三初読二論語一詩序」に「先聖の微言、円通なること、明珠の如し」（文粋九）とある。「転」のヨムの訓は「転ョム」（類聚名義抄）による。珠を転（まろ）ばすことにいいかける。（第二句注）**子供が習っていた文王の楽、**

周公の詩の舞も、（王度の中国音による講読によって）今や一人前の武舞となった。舞象は童舞で、文王の武功を象り、周公がその詩を作った武舞の一種。丁年は、二十一歳をさす。（補注）「舞象」は礼記・内則に「成童象を舞ふ」とあり、疏に、「舞レ象、謂レ舞レ武也、熊氏云、謂下用二干戈一之小舞上也」とある。（第三句注）**これから（この王度の読んだ方法によって）古の聖帝の古典研究を究めつくすならば。**墳典は三皇五帝の旧辞。（第四句注）**ただ論語二十篇を読んだだけの功徳に終わらないだろう。**

この訳注を読むと、王度なる通事らしき人が中国音で読み講じ、それを道真或は菅家の門下生等が聴き学ぶ光景を想定しておられるらしい。そして、その教えを糧に古典研究に精通したら『論語』を読んだ以上に大いなる功徳があるという事のようだ。

稿者が先ず気になったのは、もし王度が教える側であるなら、「王度の論語を読む（或は講ずる）を聴き畢り……」とでもあるべきではないのかということ。次いで「舞象」の川口注の意図が全く理解できなかったのである。『礼記』（内則）の一節は、男子の一生を略述する文脈中のものであり、その年令次におけるやるべきこと学ぶべきものなどを次のように記している条である。

十年出就二外傅一、居二宿於外一、学二書計一。衣不二帛襦袴一、礼帥レ初。朝夕学二幼儀一、請二肄簡諒一。十有三年学レ楽誦レ詩舞レ勺。成童舞レ象、学二射御一。二十而冠、始学レ礼、可三以衣二裘帛一。舞二大夏一、惇行二孝弟一、博学不レ教、内而不レ出。

（私訳）生まれて十年たつと母親の手元を離れて外に出て教学の師に就き、（親と別々に）住居して文字の読み書きや計算を習う。少年は絹の下着などつけず厳しく礼儀の初歩から習う。つまり朝夕に少年としての行儀作法を学び、文字や応対の口のきき方を習う。十三年たつと音楽を学び、『詩経』を暗誦し、勺の舞を習い、**成童（十五歳以上）になると象の舞を習って、弓馬の術を学ぶ。**二十歳になると元服して始めて礼を学び、絹や毛皮の服を着、大夏の舞を習って、孝悌の道を心がけ、博く学んで豊かな知性を身につけるが、まだ人に教えずに内に蓄えておく。

これに依れば、十五歳を過ぎて弓馬の術と共に学ぶとされる舞踊のことらしい。とすれば第二句は「象を舞っていた者が今遂に満二十歳（成人）になった」という意味になるのではあるま

いか。ではその年に成ったのは誰か。道真（当時二十五歳頃）や詩題・詩中に登場しない不特定の門人を指すとするのも不自然ではないか、むしろ題中の王度を指すとするのが自然ではなかろうか。王度は（川口注を生かせば）或は武舞に熱中でもしているうちに二十歳になってしまった。それ迄経書を読むような学問らしいことも余りしてこなかったな、という道真の口吻が「遂丁年」あたりに漂うように思えて仕方ないのだ。そんな彼が儒学の基本図書『論語』をひとまず何とか読み終えたわけだから何とめでたい、どれ酒杯を申しつけよう。今後ともこれを機会に多くの書物を窮めるのが宜しかろう。『論語』二十篇だけでしまいにしてしまってはいけない（しっかりやりたまえ）……と奨励訓戒する詩意なのではなかろうか。王度は渡来系に属する人だろうが、道真にとっては年下の朋輩（菅家廊下の門人の可能性もあるか）くらいの人物と見るべきではないかと考えたいのだが、どうであろうか。詩は発想や語彙の意味把握の僅かな違いから随分と違った理解に至ってしまうことがある。もとより稿者の理解が妥当か否かは猶諸氏の批判を俟たねばならないが、今一首採挙げてみたい。

36山陰亭冬夜待ㇾ月。

高斎待月月何淹　高斎に月を待つも　月何ぞ淹き
不畏風霜幾撥簾　風霜を畏れず　幾たびも簾を撥う
海伯応慵投老蚌　海伯は　応に老蚌を投ぐることに慵かるべし
山神欲惜放寒蟾　山神も　寒蟾を放つことを惜しまんと欲す
消残砌雪心猶誤　消え残れる砌の雪に　心も猶誤またれ
挑尽窓燈眼更嫌　挑げ尽くす窓の燈に　眼も更に嫌いぬ
珍重東頭光数尺　珍重す　東頭の光数尺の
如無如有独纖々　無きが如く　有るが如く　独り纖々たるのみなるを

本詩は前掲詩以上に頭注・補注の量が多いので、殊に第三・四句に限って採挙げたい。

（第三句注）**月が出ないので海中の水神は、老いて真珠を胎まなくなった蚌を海中に投じようという気にもならない。**（補注）左思の呉賦に「蚌蛤珠を胎むこと、月とともに虧け全し」とある。（第四句注）**山神は月が面をあらわすとともに月中の蟾蜍がとびだすのを惜しがるようだ。**姮娥が西

王母から不死の薬を盗み出して、月中ににげこんでひきがえるに化したという故事（後漢書・天文志の注）による。

稿者も「三・四句は月が出ようとして出ないことを典故によって美しく表現」（川口氏頭注）していると思う。第三句は月が海上より出ること、第四句は山際より上がることを念頭に置いていることは海伯・山神の対からも明白である。

海の神が億劫で気がすすまないのは「老蚌を投ずること」であるから川口訳で良さそうに思えるが、ところで「老蚌」とは何か。「自憐滄海畔、老蚌不レ生レ珠」（白楽天「見三李蘇州示二男阿武詩一自感成レ詠」）ではもう子供のできない老いた身（白楽天、或はその妻）であることを歎ずる中で用いられているが、一体蚌と月はどのように関わるのであろう。前引の左思「呉都賦」（呂向注に「蚌蛤珠胎、皆盈虧之物。月満則珠全、月虧則珠欠」とある）や「淮南子曰、蛤蟹珠亀、与レ月盛衰」「晋郭璞蚌賛曰、（中略）与レ月盈虧、協レ気晦望」（『芸文類聚』巻九十七・蚌）、更に「月群陰之本也。月望則蛤蚌実、群陰盈。月晦則蚌蛤虚、群陰虧」（『呂氏春秋』巻九・季秋紀・精通）などによれば、蚌と月は盛衰を同じくし、望月の頃には蚌に実（珠）あり、晦日には虚（からっぽ）となると知られる。勿論「驪龍頷被探レ珠去、老蚌胎還応二月生一」（劉禹錫「答三楽天所レ寄詠懐一且釈二其枯樹之歎一」）とも詠まれるように月の生ずると共にまた珠を胎んで循環することは言うまでもない。とすれば、老蚌とは珠を生じない、欠いている蚌のことで、月で言えば晦日頃（月の出の刻限の遅い下弦の月）のことを指していることになるのではあるまいか。もともと「天漢看二珠蚌一、星橋観二桂華一」（庾信「舟中望レ月」『初学記』巻一・月）の如く、蚌には月の意もあると見て良かろう。そこで前掲の第三句は、「（冬の夜に月の出を待つもののなかなか上って来ないのは何故かと言えば）きっと海の神が細々とした下弦の月を空に投げ挙げるのを億劫で気がすすまないと思っているからであろう」と訳したい（細い繊月と見たのは末句の表現とも対応）。

第四句の川口注も訳と注解が混合しているように思う。「寒蟾は「蟾兎並（五経通義曰、月中有三兎与二蟾蠩一何。兎陰也、蟾蠩陽也。而与レ兎並、明陰係二於陽一也）」（『初学記』巻一・月）「又（張衡霊憲）曰、姮娥奔レ月、是為三蟾蜍一」（『芸文類聚』巻一・月）などという謂れはともかく、月中に蟾ありとする故事に従って、「蟾」は単に月の意とみてよく「寒」が付いているのは冬の月であったからに他ならない（116「水中月」、119「余近叙詩情怨

一篇云云」詩にも見え、川口博士もそう注している）。従って、第四句は、「（月の出を待つものの、なかなか出てこないのは）山の神が冬の月を空に出さないようにしっかりと捕らえていて手放すことを惜しんでいるからだ」ということになるかと思う。

故事の把え方をめぐって、詩の理解に微妙な違和感を覚える場合もなくはない。

送客何先点涙痕　客を送るに　何ぞ先づ涙痕を点ずる
応縁別後不同門　応に別れし後に　門を同じうせざるに縁るべし

今朝記得帰来日　今朝記し得たり　帰来りなん日
万里程間一折轅　万里程の間に　一折轅にてあらんことを
（44「花下餞三諸同門出二外吏一各分二一字一探得レ轅」）

菅家廊下出身の者達が受領となり任地に赴くことになり、彼らの為に餞宴を設けた折の作。旅立つ人を送るにつけても先ず涙が流れてならぬのは何故か。それはきっと別れて旅立った後は、わが家の門を同じくして面を会わせて親しく語り合うことも久しくなくなると思うからだろう。見送りする今朝、わが心にしかと刻みつけておくことにしよう、君達が任果てて都に帰還する時、遙か万里の道途に一台の轅の折れた車だけの身であらんことをと。稿者は如上の意ととりたいが、末句の「折轅」について大系本は次のように解する。

地方官の任を終って、さあ帰ろうとするおり、万里の里程に旅立とうとするおりに、（諸君は）**きっと州民たちから慕われて、轅もくじいてその別れを引きとどめられるであろう。**「帰来」の「来」は助詞。（補注）漢書・侯覇伝に、侯覇が臨淮の太守となり、召しかえされる時に、百姓は「轅に攀ぢ、轍に臥して」留まらんことを願ったという故事などによる。

川口博士が所謂「秦彭攀轅・侯覇臥轍」（『蒙求』）の故事を念頭に置かれているのは明白である。共に善政の良吏として名高い人物と言えよう。後漢の秦彭の離任時には老幼が轅にとりすがり惜しんだと言うが、その一族は実は漢建国以来代々の高官で「万石の秦氏」と言われる世望を背景に持つ人物であり、後漢の侯覇はと言えば、やはり離任時に住民が車をさえぎり路上に臥して留まらんことを願ったというが、もともとは大変な資産家の息子で金儲けに気を遣うことなく学問することができたし、大司徒（丞相）の地位に迄昇っている人物である。実は「折轅」は如上のような人の故事ではなく、以下の「張堪折轅」（『蒙求』）

の故事とみるべきなのである。聊か長いがわかり易く説明を加えておきたい（『後漢書』巻三十一・列伝第二十一〈張堪伝〉参照）。

後漢の張堪は字を君游といい南陽の宛の人である。早くに父を失い、餘財の数百万を兄の子に譲り、十六歳の時に長安に出て学業に努めた。その志行美にして厳格であったことから、学者達は彼を「聖童」と呼んだという。世祖に嘉され郎中となり、後に大司馬呉漢を助けて、蜀都太守として公孫述討伐に功あり。そして成都に逸早く入城するや、庫蔵を検閲。珍宝を厳正に管理して一かけらも私することなく、役人や民を慰撫して大いに喜ばしめたのであった。その後、匈奴を撃破し、漁陽太守となり、姦悪狡猾な輩を捕縛したり撃滅せしめ、賞罰を正しく下したので、役人も民も彼に用いられることを楽しみとしたという。匈奴がかつて万騎をもって漁陽に攻め込んだ時、彼は数千騎を引連れ大活躍している。よって郡界は静まり、そこで稲田八千餘頃を開拓し、民に農耕を勧め豊かな生活をもたらした。人々は「桑に附枝無く、麦穂両岐す、張公の為政、楽しみ支るべからず」とその善政を称えたという。在任八年、匈奴は彼を憚り境界を犯すことはなかった。帝がある時、諸郡の会計担当者を都に召集して、各々の土地のことや郡守県令の政治手腕について問うたところ、蜀郡の担当の樊顕なる者が進み出て次のように言う。

漁陽太守張堪、昔蜀に在りし時、其の仁を以て下に恵み、威能く姦を討つ。前に公孫述の破れし時、珍宝山積し、捲握の物すら十世を富ますに足る。而るに堪の職を去る日は、**折轅車に乗り、**布被の囊あるのみ、と。

帝はこれを聞き、感服の余りしばし嘆息された。張堪を召し出そうとするが、既に病で没したことを知って深く悼み、惜しんで詔旨を下して褒め称え帛百匹を贈ったという。これによれば、張堪は平和で豊かな生活を民衆に齎し（開拓のことも大きいか）、公平な人物で私欲に走ることなく、離任の際にも轅の折れたままの車に、粗末な袋を持つだけで立去ったという。道真はこの故事を他に「327書レ懐奉レ呈二諸詩友一」「357左金吾相公於二宣風坊臨水亭一餞二別奥州刺史一同賦二親字一」詩等でも用いており、門下生に張堪の如き清廉な官吏たらんことを期待したのに違いあるまい。[7] 律令制度に依る国家支配が地方政治のレベルで行詰まりを見せていた当時、所謂「良吏」と言われる者達の経験智が中央で施策として取込まれていく一方、律令国家体制に対峙す

る地方豪族の擡頭――それは彼ら自身や農民達の生活を確保する為の行動だったのだが――により、律令国家の維持の困難さが次第に明らかになってゆく。その中で自と良吏も変容を余儀なくされつつあったという転換期が、道真の青年時代即ち貞観期という時代であったのだった。[8] 稿者は猶歴史把握についても実は暗い。ただ道真詩の中に『三代実録』等の同時代の歴史資料と突合わせる中で、彼の詩文をより精密に検討分析してゆくことも重要な課題となりうるのでは、と今は臆測するばかりである。

四　むすびに

日本古代の文学作品として『菅家文草』『菅家後集』が破格の存在であることは、恐らく誰しも否定できないのではあるまいか。菅原道真という時代の中で位人臣を極めた個人の生涯に渡る精神生活、文学的営為が綴られている点で、他の誰に、どのような作品にこれに匹敵するものがあると言えるだろう。

日本という恵まれた風土の四季の移ろいの中で、道真が何を見、どのような感興を抱き詩に紡いでいったのか。またそれが、後世の文学の表現世界とどのように関わるのか。指導者としてまたいかに門人達や友人達に暖かな眼差しと訓戒を惜しまなかったか。その個人の苦悩を詠いながらも、時世に鋭い視線を向け、その一方でいかに家族を愛したか。その表現世界は、現代の人々の心にも強い感動と共感を与えてくれるに違いないことを確信している。道真の詩文集は、勿論学術研究の対象としても重要なことは言うまでもないが、そうでなくても日々掬すべき、楽しむべき佳篇を多く有している。そうした世界を少しでも多くの方々に知って戴きたい。そして、その役割の一端を担ぐのはやはり日本の古典文学研究に携わる者としての責務ではないのかと、身の程も弁えず愚考する次第である。

注

(1)　「『菅家文草』巻一注釈稿（五）」（『白百合女子大学研究紀要』第三十二号、平成八年十二月）。猶、青家については赤井益久氏「唐詩に見える『青家』をめぐって」（『国学院雑誌』昭和六十年十一月）もある。ところで本詩の注については川口・佐藤両氏の注とは見解を異にする点もある。「紋竹」の件もそうだが、第十句につ

いては、「養二青田一（永嘉郡記曰、有二洙沐渓一、去二青田一九里、此中有二一双白鶴一、年々生レ子、長大便去、只惟餘父母一双在耳、精白可レ愛、多云神仙所レ養）」（『初学記』巻三十・鶴）「青田（永嘉記。青田有二双白鶴一、生年年長便去）」（『白氏六帖』巻二十九・鶴）などとある故事をふまえているかと考える。「聽二其悲唳声一、亦如レ不レ得レ已、青田八九月、遼城一万里」（「和四微之聽三妻弾二別鶴操一因為解二釈其義一依レ韻加二四句一」『白氏文集』巻五十一）「臨レ風一唳思二何事一、悵二望青田一雲水遥」（「池鶴二首」其一、同上巻五十六）もその故事をふまえたものに他ならない。

(2) この殺青のことは道真は他でも「殺レ青書已倦、生レ白室相宜」（「疎竹」『菅家文草』巻二）と用いている。「賦得詠青」詩で「殺青」の用字を採らなかったのは当該詩の趣旨が青字を用いずにそれをイメージさせる詩句を展開する必要があったからであろう。「殺竹」としても何ら意味上不都合なことはない。

(3) 「釈奠の作文」（『三訂版平安朝日本漢文学史の研究』上巻第五章第四節、昭和五十年、明治書院）参照。

(4) 波戸岡旭氏は近稿「菅原道真の釈奠詩――文章生時代を中心に――」（『儀礼文化』第二十八号、平成十三年三月）で貞観五年八月の作とされる（本稿校正中で、書入れとなったことをお侘びする）。

(5) 猶詳しくは拙稿「『類題古詩』節記」（同志社女子大学『日本語日本文学』七号、一九九五年一〇月）でやや詳しく記したので併読を乞う。

(6) 稿者案ずるに、「論語を円珠経といへるは五山の僧の云ひ習はしたるにやと思ひしに、曽我物語にも見えたれば、博士の家の詞なるべし」（荻生徂徠『南留別志』）などと見えることを念頭に置いておられるのだろう。

(7) この張堪伝を記す一方で、稿者は例えば以下の如き卒伝をイメージとして重ねずにはおれない。「従四位下行信濃守橘朝臣良基卒。……幼而篤学。早有二風概一。明練二治体一。清正立レ己。……良基治大帰二放紀今守之体一。勧二督農耕一。軽二其租課一。民下楽レ業。家有二贏儲一。輸二貢調庸一。増二益戸口一。為二当時之最一。時人以二循良一相許。……良基雅素清貧。家無二寸儲一。……経二歴五国受領之吏一。毎レ秩罷帰。不レ載二資糧一。教二子孫一以レ潔レ身。有二子男十一人一。第六子在公。嘗問二治国之道一。良基答曰。雖レ有二百術一。不レ如二一清一。其率性清白如レ此矣」（『三代実録』仁和三年六月八日）。

(8) 佐藤宗諄氏『平安前期政治史序説』第四～六章（東京大学出版会、昭和五十二年）参照。猶、道真が後年「貞観末年元慶始、政無二慈愛一法多レ偏、雖レ有二旱災一不二言上一、雖レ有二疫死一不二哀憐一」（221「路遇二白頭翁一」）などと詠んでいるのも喚起される。